

◆ 第11回 「乾乳期の飼養管理」

～乾乳期には最良の3種類以上の粗飼料を～

乾乳期の最大のポイントは粗飼料です。泌乳期は濃厚飼料からの栄養でごまかせるのですが、乾乳期は粗飼料主体でエネルギーを充足することになりますから、ごまかしがききません。

ですから乾乳期には手持ちのうちで最良の粗飼料を与える必要があります。危険分散の意味から、粗飼料の種類も3種類以上は確保したいものです。「乾乳期は稼がないから悪い餌で十分だ」などという考え方では、生産効率の向上は望めません。

乾乳期の飼料中カルシウム濃度は、イオンバランスを調整することでカルシウム濃度を下げないという最先端の方法と、カルシウム欠乏状態で飼養する昔ながらの方法、2通りがあります。

前者は近年、盛んに行われてきましたが、その多くは失敗しています。その原因としては、調整剤の嗜好（しこう）性が悪いことのほかに、日本では均質な粗飼料を安定して得ることができないことがあります。今日でもアメリカから最先端の情報が酪農家や臨床獣医に垂れ流されていますが、今の酪農家には、最先端の飼養管理技術を自分の牛群で実験する余裕はないはずです。

アメリカと日本では酪農の状況が全く異なることを認識して、最先端に走ることなく、安全かつ確実な方法を実行することが重要です。基本ができていないのに、最先端のことを試してもうまくいくはずがありません。

乾乳期の飼料中カルシウム濃度は1日50グラム以下に抑えた方が、産後起立不能の発症が少なくなります。ですから乾乳期にはルーサン乾草やヘイキューブの給与はやめるべきです。

乾乳期の濃厚飼料は1日1～1.5キロ程度を与えますが、でんぷん濃度が下がりすぎるとルーメン微生物に悪影響を与えます。濃厚飼料はルーメンの絨毛（じゅうもう）を発達させるので、この時期にきちんと与えていないと分娩（ぶんべん）後のルーメンからのエネルギー供給がうまくいきません。

逆に与えすぎると肝臓への負担が増え、分娩後に病気が多発します。

